



荏苒他流傳書

上

5
4421
1



門 へ 5  
4421  
巻 1

へ 5  
421  
1-3

芭蕉流俳諧傳書卷上

為らばや陸船を水乃音

道なきの才糧を多し吟遊を

ふれ二句の裁おのりて其をなす

はなれんて後その意味の深知人

おとつひし中業平吟遊を海苔の砂

影をたぬるももてんは影のあり

海の雲の稲妻のまじりたる

とてあつたもたつてなりては

四時を記およくて中業平吟遊の

昭和九年  
九月二十九日  
購求









るあ元姓そ 殊る夏月をきく 一茶の煙

さよよのちのちのちのち

名月也 湖の平うう分を京町

空を食の日 旅人多きらん 飢つらん 藤白

明乳子 赤まより 竹垣人か 嵐色

禪の草 足袋おたのしむ 許六

かくのこくとく 一句年かん 終を二ツま

はくしん ちん ちん ちん ちん ちん

元日 灌佛 名月 臘八

その終て 陸地なり 一のちてとよと

いふちいふちいふち

深衣 而後 暢身 馬上 ちん

ちん ちん ちん ちん ちん ちん

。和歌の言葉 ちん ちん ちん

紙衣のめり ちん ちん ちん

著重年 鶯 ちん ちん ちん 玄梅

佗 ちん ちん 貝 ちん ちん ちん 其角

か ちん ちん ちん ちん ちん ちん 源若丸

新 ちん ちん ちん ちん ちん ちん 鬼を

和歌のちん ちん ちん ちん ちん ちん

古 哲 田 ちん ちん ちん ちん ちん ちん

ちん ちん ちん ちん ちん ちん ちん





ろせせ成物ふして鹽平ふをこさくおそ  
牡丹芳く水も清く白らわ 甚く支  
高ちるは雲ふしきくに風ぬさるん 幸か幸

わにふ一字あふりても昔はさふ  
くもくは風推のうへありあへ

あーを海み波のりのみあけてかく  
あふりあふりにはよあへは雲のさかき思  
たふ

新月也 あもゆんからわ  
吟 月影よ あはやあやゆん

いそぎふちりるはつてあーあー  
いそぎふちりるはつてあーあー

あーあー二日のあふりてあーあー  
あーあーあふりてあーあーあふり

二田のあふりてあーあーあふり  
あーあーあふりてあーあーあふり

あーあーあふりてあーあーあふり  
あーあーあふりてあーあーあふり  
あーあーあふりてあーあーあふり  
あーあーあふりてあーあーあふり



さう同回こゝりなる時 一物めえあし  
とも海人のそいつ 一子阿道をうめ  
一物編く たるん 一子すまの雅  
心あり 阿道つゝ 一子めぬおほ  
耳をすまふ 一子めぬおほ

。 龍もあけ

あしはうり角張わけしは不測  
卯のそやうの御山のあま語 其の用  
紫のあし 一子めぬおほ 二連  
軍書そのうり 一子めぬおほ  
思ひあまらぬ

又ふ古人のなを白ゆに 以てんとなふ  
西平 一子めぬおほ

義仲の御らん 乃山を林うめ

一子めぬおほ

祖の御らん 一子めぬおほ

こゝに 一子めぬおほ

一子めぬおほ

一子めぬおほ

。 以てぬおほ

一子めぬおほ 輓士

意うある山が柳のふさふさ  
支考  
五葉の山ミナノルのふさふさ  
つらふさふさ

山青花欲然江碧鳥愈白  
歌年々

歌年々  
こころのふさふさ  
つらふさふさ  
も  
。名所をばはらふ  
みこころにふさふさ

木母年歌のふさふさの月 其角  
下京や宮庭にふさふさ 凡北  
かくのふさふさ  
かくのふさふさ  
上のかのふさふさ  
名所をばはらふ  
ふさふさ  
よし世にふさふさ  
映控る白雲のふさふさ  
。名所をばはらふ

口切不憚の巻うりたり  
ほろろを裁り友人朝霧せん  
ふじはまも末るの白ひの松の  
袋水 素牛

ちかうにまうりかろのくも  
阿のほ命一もあまのいも  
知る人信よりのゆき宇治の  
西千以を出し一はるんはる  
名平のあまのり

菊のまやまうり平の古き御達  
朝さうよの物清くも夕さあふ  
あま清れはひ平をゆきうりの山  
書山 志木

あまの物もいもまはるんはる  
あまの物もいもまはるんはる  
又 其角

又 其角  
又 其角  
又 其角

又 其角  
又 其角  
又 其角

又 其角  
又 其角  
又 其角



正しくし川に下る

以て水を通りて流るの體也乎 眞室

そなたの心はわきまなくそなたの心はわきまなく

阿ふそなたの心はわきまなく 他の方をみる

るにこそれはさるるにこそれは

そなたの心はわきまなく 川に下る心と云物

ふふふにしはさるるにこそれは

とらん

。 名ふふふふふふふの句あり

かたがはふふの杖突板ふふふふふ

歌書より七軍きたるふふふふ 支考

名ふふふふふふの句あり

まふふふふふの句あり

杖にふふふふの句あり

の句あり

新よふふふふの句あり

まふふふふふの句あり

まふふふふふの句あり

。 古事古語古詩古歌をばふる

知三の句あり

よふふふふふの句あり

淮南子説替

大度成而燕雀相賀

何れいさや玉の阿さりの阿さね

撰集抄中務元輔扇歌二首

うさねあつとつあつと海ふ

妙扇歌あつと扇平何さまうはれい

さふあゆりか 又心地 扇さつとさめ

阿さりの阿さねの 又心地 阿さりてあつと

とゆらん人七あつとをさりと

阿さりとはいはばねあつとも秋の風

明詩平 秋風吹將暮 古道行人少

愛此微陽色 村家霜中衣

あつとあつとあつとのあつと十六里

伊がえのあつとあつとあつと伊がえ上野

あつとあつとあつとあつと十六里や

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと 其角

古今

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつとあつと





東城のついでにさしづきの岩の巨解子河に  
初段の白明月や湖のむらにむらむら七町とふ  
所の注を 欲把西湖比西子淡濃粧沫也相宜と  
ありてはこれれは名月や湖水にむら  
その句入る 一おやあふささ色ハ二百十四  
句あり一白ふき色はこたふらぬを後入へ

名月のついでに

句のむらむらに夏の晴をま 曾良

古人の冠をこしらへてあつたありのむら

黒塚や鬼のむらとふらとふらと 維舟

大和のむらとふら

鬼のむらとふらとふらとふらと

不二千のむらとふら三月七日のむら 信徳

日出芙蓉谷下夕宿芙蓉谷下宿 既

三宿未出芙蓉谷下

この句信徳のむらとふらとふらとふらと

神祇

多のむらとふらとふらとふらと 涼葉  
多のむらとふらとふらとふらと 朝竹  
多のむらとふらとふらとふらと 河



身の内をくぐりてあやむる如く  
影を映して物とて立見し  
影をよそよそと御紙に用事  
いふはたまたまさるる  
そくくくくく

。 旅

年のもとのふとてやういふ  
さゆらぐ茶うら人時とらん  
まの尾ふ跡をまよやま  
標乃教つてまよまよ  
土の欠りゑんつておのれ  
山月 惟然 碩兒 物豊

旅のうらあまらういふ  
うきいけいあまらう  
おのれ  
まよまよ豊の記  
雲ふあまらうおのれ  
かく中さるるまらう

。 贈答

己をさるる  
やういふあまらう  
おのれのまよ  
茶標平つてまよ





因雨多かりんはるる 春をば 卓袋

自然秋味のわきま 思ふへ

。 田

門 晴るらん 平やうらん

夏の物もあつたに はうせふを

猿 行 ありき

あくはるらん 平らん ねえ 春の鳥 巴風

さうらん 春の鳥 ねえ 春の鳥

ねえ 春の鳥 ねえ 春の鳥 曾良

あつたに はうせふを

菊の香と月らんらん 春の鳥 積風

紙より へん

物もあつたに はうせふを 紙の香 源亮

自然秋味のわきま 思ふへ

の 春 上

松風 春の鳥 ねえ 春の鳥

さうらん 春の鳥 ねえ 春の鳥

卯の香と月らんらん 春の鳥

さうらん 春の鳥

春の鳥 ねえ 春の鳥 春の鳥

ねえ 春の鳥

あつたに はうせふを 春の鳥 穂市



形をいさの、故をふらひて  
あし世の故をいせつて後うぬ

相雨

追悼

あき人の少神もたやと月一

うそやを核ゆるるの味より

種さへてを又をやと月一

菊の一団を年自像と画す

好美のやお世を言の成れとて

如乃年を年一葉をさし

お水にうづりて入るるを

文子の葉を年一

念貫

知足

新六

新六

生角

生角

形をいさの、故をふらひて

生角

あき人の少神もたやと月一

うそやを核ゆるるの味より

尚白

種さへてを又をやと月一

菊の一団を年自像と画す

懐旧

好美のやお世を言の成れとて

如乃年を年一葉をさし

お水にうづりて入るるを

文子の葉を年一

あき人の少神もたやと月一  
うそやを核ゆるるの味より  
種さへてを又をやと月一  
菊の一団を年自像と画す  
好美のやお世を言の成れとて  
如乃年を年一葉をさし  
お水にうづりて入るるを  
文子の葉を年一



字紙の巻のふ

世にありてはしるふ時々のやとて来

そとに思ひあへさるゝなるゝ

そとに思ひあへさるゝなるゝ

さるゝれそふ端ありてゝあやれ 曲を

母てかきあふてゝ

蓮乃言はれあふてゝゝ夏の氣を風洗

おあふてゝ十五日懐旧の心

おしとてゝ七橋の昔ゝうら 其角

古戰場

首領や人とのりてはるけり飛 山店

。述懐

この秋ハヤ平とゝあるをば

阿そあるの二十近そおあふ秋 八橋

母智月とゝもよゝ二井とゝあふ

先平とゝあふおを執るゝをのあふ 乙列

あふゝあふてゝあふてゝあふてゝ 聖坡

古は代々の四十あふてゝあふてゝ 嵐を

。画賛

巖窟の絵

梅もあふ巖乃とてあふてゝあふの絵

源氏画

筆跡の月年かくくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく 其の自

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく

筆跡の月年かくくくくくく



解乃尾張控々言々言の言 正秀

△一句のありしに

抑も中世をこゝろ人乃とさる 李東  
まゝくてもあまの物を産まじ

△詩のしるしなる句

贈のあつたはなつて揚あつたおや後 風  
風妖々産ま 風の過るを 李下

この二句いふなり 案の流れる句にて  
人々をこゝろあつたおの句に西風不同を  
いふは是れふの句に物おとさる人  
△一句のありしに

を南のうめゆけるうめゆき

赤しらし 我は人のさあき 嵐

いさむしみの志を 又おのさめ

やまを 人のけりもさると

おのりし 一句の志なり 幸なり

と物をおもひしに こそあり

女座の女さつふ 字平はもはる

あんなら ありしに 松下の書ふ

そしるに

△一紙ある句

なまあまを新ふ入かたりしに

了きるもあつちぢの山風うや 曲あそ

他年よきいさあ〜一能二句は力

あ〜人〜お下のあそ平〜

△子孫離道たる句

春のあ〜様〜明〜はあ〜

あ〜〜〜はあ〜うきあ〜 甚角

あ〜〜〜〜と〜い〜な〜れ〜句百句一と乃

あ〜と〜あ〜人〜〜〜あ〜の〜句は〜あ〜い〜

あ〜〜〜あ〜あ〜〜句と世のあ〜の〜あ〜

あ〜〜〜あ〜あ〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜〜〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

自に〜と〜人〜〜自に〜と〜人〜〜あ〜あ〜  
と〜と〜と〜と〜あ〜あ〜

△又

薩佛の〜の〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜 西

△又

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

てこのふくまの人の編せし時少て飛  
 子徴するの飛しよあるゆへに哉  
 の舞白干するものすまは舞少  
 づつて知るべしとつひに世に  
 の曰一庭の編よあめをいれん人  
 ぶ方すのうへ年あふなり  
 正し流やまの入る物とんて  
 舞の舞の言根乃とあふんて  
 こゝろの心ゆくぬいれや眼あ  
 へるやれなり  
 舞の舞の言根乃とあふんて  
 舞の舞の言根乃とあふんて

回文

雲のふれをわさるや新のほろ  
 なるつゆふしなほと氷を  
 物名

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

うばふらん時日ハ秋ト飛トまじり葉落

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

鴨とんて舞草やせ水のもと 立吟

回文物名  
 ねとかくのこく古人のうあまいせさ  
 華ふとあふんす人々祖を飛あふ古哲  
 ねとかくのこく古人のうあまいせさ



